

近代歴史教科書における藤原道長の評価

―観峰館収蔵コレクションからみた―

寺前公基

はじめに

観峰館には、書道教育資料として明治以降の教科書約六〇〇〇冊が収蔵されている。平成二十四年度現在、定期的に調査を行い、その成果をもとに、年三回の企画展とコレクション展あわせて四回の展覧会を実施し、その公開を随時行っている。

明治以降の教科書は、明治五年（一八七二）義務教育制度以前、戦前の検定教科書、国定教科書の時代を経て、その性格、内容、体裁に変化を遂げてきた。特に歴史教科書については、文部省より刊行された明治初期の教科書が歴代天皇による編年史の体裁をとり、明治十四年（一八八一）「教則綱領」の主旨に基づいて『校正日本小史』（大槻文彦著）が出版されると、天皇歴代史から人物を中心とする編成へと変化していく。そして国定教科書制度下においては、主として歴史上各時代を代表する人物を選び、これらの人物と関係した歴史的事実を記す方法をとるに至る。^①

さて本論で扱う藤原道長（九六六―一〇二七）は、平安時代中期、いわゆる撰関期を代表する貴族であり、父は一条天皇の時代に摂政・関白の職に就いた藤原兼家、道長はその五男でありながら、一条・三条・後一条天皇の後に自分の娘を入内させ、一時代の栄華を築いた人物として知られ、明治以降の教科書のほとんどに取り上げられている。

天保七年（一八三六）頃、その草稿が出来たとされる『前賢故実』（WBUR0022、【図版1】）は、菊池容齋により神武天皇から後村上天皇までの明君・賢人五八五名の略伝・肖像を著したものである。道長は、

三条天皇朝における賢人として唯一取り上げられた人物であり、その肖像とともに略伝が記されている。これまで歴史研究の中で十分に活用されてこなかった史料でもあるので、ここに引用したい。



【図版1】菊池容斎『前賢故実』巻六「藤原道長」

藤原朝臣道長。兼家第五子。性豪爽負氣。兼家常歎「美從姪公任為_レ人。激_二勗_一諸子_一。曰「兒輩寧得_レ踏_二公_一任影_一哉。兄道隆道兼慚救不_二敢_一對_一」。道長獨拋_レ言曰、兒固不_レ欲_レ踏_レ影。恐終踏_二其面_一。道長工_二詩歌_一。兼善_二射御_一。叙_二從五位下_一。累進陞_二正二位左大臣_一。長保二年、其女彰子立為_二中宮_一。上東門院是也。生_二後一條後朱雀_一。後一條即位。道長撰_レ政。尋讓_二撰政其子頼通_一。叙_二從一位_一。拜_二太政大臣_一。万寿四年薨。年六十二。所_レ著有_二蓮府秘抄_一。道長為_二外戚_一。專_二政柄_一。高下在_二其下_一。帝屢幸_二其第_一。錫賚重疊。富_二於王室_一。世稱_二法成寺撰政_一。又曰_二御堂公_一。

この略伝は、『大日本史』列伝第三百三十八巻を抄略したものである。冒頭の『大鏡』に加え、『小右記』『栄華物語』などを引用した略伝とともに、衣冠束帯姿の道長の肖像を描き、『後拾遺和歌集』にある「雪ふれるあした、大納言公任のもとに遣しける、おなじくぞ雪つもるらんとおもへども君ふる」とはまつそとはるる」の和歌を添える。『前賢故実』は有職故実の教科書としてだけでなく、その肖像画が明治中期以降の歴史画に多大な影響を与えたことで知られており、【図版2】、歴史教科書編纂に対しても影響を及ぼしたと考えられる。

道長に関する先行研究は、平安時代史・摂関時代史研究の分野で、歴史



【図版2】『高等小学古今事歴』巻一 挿絵

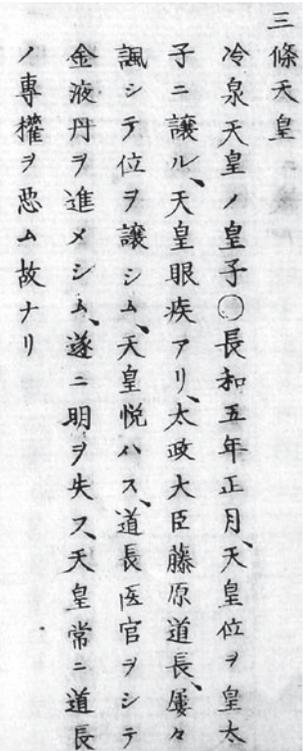
学、国文学からの研究は枚挙に暇がないが、明治以降の教科書に彼がどのように取り上げられ、評価されたかについて、その言及は皆無に等しいといえる。しかしながら、戦前、戦後の研究者たちの大半がこれら教科書より歴史教育を受容したはずであり、その影響は研究の基礎を良くも悪くも支えたことは疑いない。従って、教科書に描かれた道長像を探っていくことは、決して無意味な作業ではないと考える。そしてその作業を進めるにあたっては、当館の歴史教科書コレクションと、江戸後期の歴史書を含む和本コレクションとは、対象となる時代の資料を網羅している点で最適といえる。本論はその基礎資料の集積に過ぎないが、多くの研究者に活用していただくことを期待して論を進めていく。

一 教科書に描かれた藤原道長

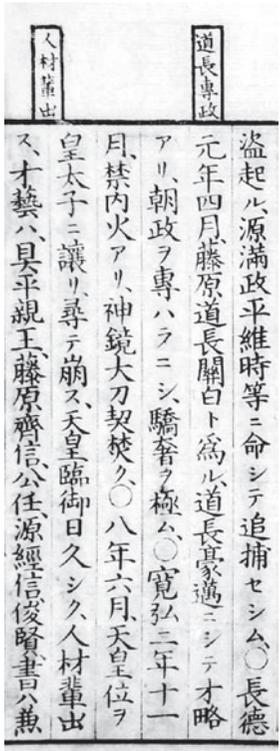
明治以降の教科書に描かれた道長像を探るにあたり、観峰館収蔵の歴史教科書一三三件、三九七冊を調査した。収蔵資料は後述べるように、一部の地域ではなく全国より収集されたものであり、明治以降の歴史教科書編纂の傾向を読み解く格好の資料群と自負できるものである。調査の結果、藤原道長という人物や行動に対し「専横」「専横」「驕侈」「奢僭」「驕僭」という言葉で評価されていることに気付かされる。その言葉は、道長を取り巻く人物や出来事の記述の中で与えられた評価であり、それらは、A―三条天皇、B―「関白」、C―法成寺、D―藤原実資、E―望月の歌、の五種類に大きく分類することができる。なお、資料に付された資料番号は、末尾に付した「観峰館収蔵 歴史（日本史）教科書コレクション目録」と対応している。

A 三条天皇

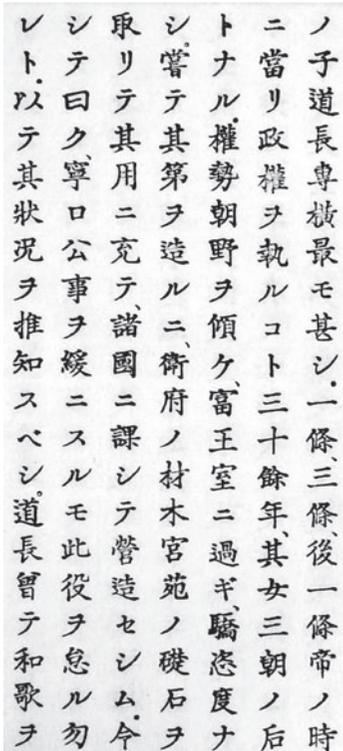
道長に関する記述で目を惹くのは、三条天皇との関係である。一般的に、道長と三条天皇との関係は、先代の一条天皇とは対照的に良好ではなかったと語られることが多い。特に長和三年（一〇一四）の天皇の眼病発生以後の関係の悪化は顕著で、道長はしばしば退位を迫ったという。その点について、明治二十年の検定制度以前の



【図版3】 『日本史略』上 三條天皇



【図版4】 『増定小学日本史略』卷上



【図版5】 『小学校用日本歴史』卷之上

教科書には、次のような記述が見られる。

『日本史略』上(明治八年、RNI-0019、【図版3】)
長和五年正月、天皇位ヲ皇太子ニ譲ル。天皇眼疾アリ。太政大臣藤原道長、屢々諷シテ位ヲ譲シム。天皇悦ハス。道長医官ヲシテ金液丹ヲ進メシム。遂ニ明ヲ失フ。道長医官ヲシテ金液丹ヲ進メシム。遂ニ明ヲ失フ。

『校刻古今紀要』一(明治十四年、RNI-0023)
初天皇眼ヲ患フ。道長医ヲ進ム。医方ヲ誤リ遂ニ明ヲ失フ。道長屢遜位ヲ諷ス。是ニ至リテ脱履ス。

この出来事をうけ「天皇常ニ道長ノ專權ヲ悪ム故ナリ」(RNI-0019)とし、両者の対立関係、道長の「專權」を強調する。

B 「関白」

次に注目されるのは、道長が「関白」に就任、あるいは「御堂関白」と称されるものである。

『増定小学日本史略』卷上 一条天皇(明治十六年三刻、RNI-0025、【図版4】)
長徳元年四月、藤原道長関白ト為ル。道長豪邁ニシテ才略アリ。朝政ヲ専ハラニシ、驕奢ヲ極ム。

『校正日本小史』上(明治二十年再版、RNI-0026)

道長、豪爽ニシテ膽略アリ。一条三条後一条三朝ノ政柄ヲ握ルコト、三十餘年ニシテ、其四女ヲ四帝(一条三条後一条後朱雀)ノ后妃トシ、三帝(後一条後朱雀後冷泉)ノ外祖ト為リ、身ノ榮達ニシテ、志行ノ驕僭豪華ナリシコト、前代ニ嘗テ聞カザル所ナリ。後、祝髮シ、年六十二ニシテ薨ス。御堂関白ト称ス。

これらの教科書は、道長が関白の高位に上ったことで、「政柄全く己に帰し、百官の黜陟進退、其欲する所のままならざるはなく、富皇室に超す、豪華其比を見」(RNI-0039) ないままでに変わったとする。

C 法成寺造営

道長出家後の寛仁三年(一〇一九)より開始された法成寺造営も教科書には多く取り上げられる。その多くは、造営の際、その資材をどこから調達したかであった。

『小学校用日本歴史』卷之上(明治二十二年三版、RNI-0033、【図版5】)
嘗テ其第ヲ造ルニ、衛府ノ材木宮苑ノ礎石ヲ取りテ其用ニ充テ、諸国ニ課シテ營造セシム。命シテ曰ク、寧ロ公事ヲ緩ニスルモ此役ヲ怠ル勿レト。以テ其状況ヲ推知スベシ。

『帝国小史乙号』卷之一下(明治二十六年、RNI-0043)
老年におよびて法成寺を建てし時、諸国に課して之を造営せしめ、公卿以下に「寧ろ朝廷の事を後にすとも、道長の命令を怠る勿れ」と命じ、衛府の材木、宮苑の敷石を取りて、其用に充てたり。

『高等小学古今事歴』卷一(明治二十六年訂正再版、RNI-0036)
其晩年に法成寺を京極に建てて、東大寺に擬し、公卿以下に課して、工事に従ハしむ。又其第宅を禁闕に擬

し、⁽¹⁴⁾水材工役、皆之を官に取りしと云ふ。

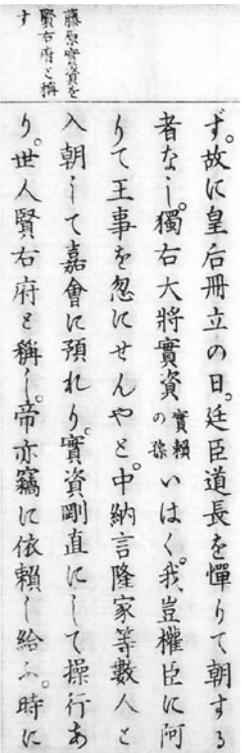
法成寺造営を取り上げる教科書の多くが、この行為を「之を藤原氏全盛の時とし、又専横非道の極とするなり。」
(RNI-0043)と評している。

D 藤原実資

同時代に活躍した貴族の一人である藤原実資もまた、教科書に多く取り上げられる人物である。藤原実資はその日記『小右記』で知られ、望月の詠歌に際し、道長に対し「秀歌に和せざるは古例なり」と語り毅然と返歌を断った人物として知られる。実資に関しては、以下のような記事が見られる。

『高等小学古今事歴大要』巻一（明治二十五年、NIN-0004）

朝廷の臣、皆道長に屈従せしも、実資獨毅然として動かず。天皇為に深く之に依頼し給へり。上東門院の入内するや、道長時の名家に乞ひて、和歌の屏風を作りしに、実資拒て之を作らず。亦其人となりを知るべし。後一条天皇嘗て凶夢を夢み給ひしに、佛経を誦せられんことを勧むる者あり。実資之を止めて曰く、陛下唯己を正しくして、政を修め給ハ、如何なる凶邪も、之を犯すこと能ハざるべしと、其人の剛直なること、概ね此の如し。是により、道長も常に此人に畏服せりと云ふ。



【図版6】
『新撰小学歴史』巻上

『新撰小学歴史』巻上（明治二十年訂正出版、RNI-0032、

【図版6】

帝（三条）大納言濟時の女を立て、皇后とし給ふ。是より先き。道長其第二女を納れて女御とす。此に於て中宮たり。（皇后。中宮と並び立つること一条帝の御時に始まる。）道長陰

に憚す。故に皇后冊立の日。廷臣道長を憚りて朝する者なし。獨右大将実資（実頼の孫）いはく。我豈権臣に阿りて王事を忽にせんやと。中納言隆家等数人と入朝して嘉會に預れり。実資剛直にして操行あり。世人賢右府と稱し。帝亦竊に依頼し給ふ。

道長を「専横」などと批判したのに対し、実資は「天皇もこれに依頼し給ひぬ」（NIN-0032）存在として描かれている。

E 望月の歌

望月の歌は、道長の栄華の絶頂を示す逸話として、明治二十年代半ば頃よりしばしば教科書に見られる。

『小学校用日本歴史』巻之上（明治二十二年三版、RNI-0033）

道長曾て和歌ヲ詠ジテ曰ク、

此世をバ我世とぞおもふ望月のかけたる事もなしとおもへば

藤原氏ノ奢僭、此ニ至リテ極マレリト謂フベシ。

『高等小学古今事歴大要』巻一（明治二十五年、NIN-0004）

一家三后を出して、天皇の外祖となりしハ、前古に比類なきなり。嘗て上東門院の第に会集したりしが、道長喜に勝へずして、和歌を作る。

この世をば我世とぞ思ふ望月の、
かけたることもなしと思へば。

道長の驕僭、以て知るべし。

ありて勢をふるひ其の女は三人まで皇后となり、其の外孫に當らせたまふ皇子は三人まで引きついで御位に即きたまへり、後一條天皇の御代、道長攝政となり、其の女ついで皇后に立ちし時、道長喜にたへず歌をよみていはく、

このよをばわがよとぞ思ふ、もち月の
 かけたることもなしと思へば、

と此の歌は、おのが望の皆かなひたるを、十五夜の満月に引きくらべて、此の世はおのれ一人のものぞといふ意味にして、其の榮華にほこれるさまを知るべし。かくて道長の富は皇室にもまさり思ふまゝにおごり

【図版7】『尋常小学国史』上巻

この歌の解釈については、「此の歌は、おのが望の皆かなひたるを、十五夜の満月に引きくらべて、此の世はおのれ一人のものぞといふ意味にして、其の榮華にほこれるさまを知るべし。」(『尋常小学国史』上巻、大正九年、RNI-0065、【図版7】)とされ、これをもつて道長の評価を「藤原氏ノ奢僭、此ニ至リテ極マレリト謂フベシ。」としている。

二、藤原道長の評価の検討

次に、AからEの内容について、その根拠はいずれにあるのか、はたしてその評価は妥当であるのか、各々検討していきたい。

A 三条天皇

三条天皇がその眼疾を理由に道長に讓位を促されたことは、藤原実資の日記『小右記』などに詳しいが、これらの教科書は、その原因を、道長が医官に命じて処方した投薬により、あるいは道長が遣わせた医官が処方方を誤り失明したとする。これは道長の日記『御堂関白記』をはじめ、『小右記』、あるいは同時代の記録類には言及がなく、史実としての客観的な裏付けを持たない。この記述の淵源は、江戸後期に出版された二つの歴史書に求められる。

『国史略』卷之三(岩垣東園 文政九年(一八二六)、WRE-0131、【図版8】)
 帝憤道長専權 既而不豫。医官誤治進以金液丹(一作紅雪)。遂至失明。

是謂神誤、相續此後
 三世相行、故略不載
 又災、帝憤道長専權、既而不豫、醫官誤治、進以金液丹、
 遂至失明、道長數、遜位、帝不悅、稍決意、脱屣上、太上天皇、
 皇尊、號、後一條帝、寬仁元年、崩、于三條院、
 【図版8】『国史略』卷之三

『日本政記』卷之八 三条天皇(頼山陽 弘化二年(一八四五)、WRE-0090)
 十一月禁内火。復徙枇杷第一。目疾不癒。道長使医官以寒水進金液丹。遂失明。

江戸後期の儒学者である岩垣東園が著した『国史略』は、歴代天皇の通史で、神代から後陽成天皇の聚楽第行幸までを叙述する。また頼山陽の『日本政記』は、同じく歴代天皇の簡略な通史で、一条から後一條天皇の項に道長の記述がある。明治五年(一八七二)に制定された「小学教則」によれば第六学年前期の第六級の史学輪講において『国史略』を生徒に自習させ順番に講読させることを指示しており、その内容が教科書の素材となった可能性は高い。そしていずれの史料にも「金液丹」を処方したために三条天皇が失明したとするが、『国史略』は医官が処置を誤ったとしている反面、『日本政記』では道長が医官に命じた結果、と両者のニュアンスは異なっている。

しかし、これが歴史事実として必ずしも実証されていないことは明らかである。「金液丹」は『大鏡』によれば三条天皇が目病を発症した時に服用した薬で不老長寿の薬とされ、『小右記』には「丹薬」を服用したが、近頃は片目、片耳が聞こえない状態であった(長和三年三月一日条)。また侍医を務める清原為信が奏上したところによると、その症状であれば「紅雪」を服用すべきである、とのことだった(同月三日条)。小右記の記事からは、道長が命じたとか、「金液丹」あるいは「紅雪」を服用したから失明したという事実は見出せない。そのことは、『校刻古今紀要』が明治十四年に出版された後、『訂正古今紀要』(明治十八年、NIN-0029)において該当部分が削除されたことからもうかがえる。

また三条天皇との関係においては、その嫡男・敦明親王の廢太子についても言及されている。この事件は主に『小右記』に取材したものである。

『翻刻再版日本略史』上(明治十年、NIN—0001)

三条天皇、勅シテ、子敦明親王ヲ立テ、後一条天皇ノ儲貳トス。其ノ統ヲ存センコトヲ、欲スレバナリ。既ニシテ、東宮、位ヲ辞ス。道長奏シテ、小一条院ト号シ、上皇ニ准ジ、皇弟、敦良親王(後朱雀天皇)ヲ立テ、皇太弟トス。

『増訂日本小史』上(明治二十九年、RNI—0046)

皇子敦明親王(母ハ藤原濟時ノ女)ヲ其太子トス。帝ヨリ長ズルコト十四歳ニシテ、且道長ノ意ニアラズ。三条崩ジタル後ハ、臣僚道長ヲ畏レ東宮ニ起居スル者ナシ。太子樂マズ。遂ニ位ヲ遜ル。

教科書の中には「道長大に喜びて、之を廢し、」(RNI—0054)や「肯ヲ矯シテ、敦明ヲ廢シ、」(RNI—0014)とあり、確かに敦良親王(後の後朱雀天皇)が立太子したことにより「道長の専横、是に至りて極ま」(RNI—0050)だったのであろうが、敦明親王の立太子は、三条天皇と道長との政治的駆け引きの中で決定したことであり、三条天皇崩御後の有力な後見をもたない親王にとってはまさに「楽しみ給は」ざる状況であった⁽⁴⁾。従って、この事件をもって道長を批判するのはいかなものだろうか。

ところで一条天皇との関係はというと、教科書には強調して描かれることは少ない。「関白、藤原道長、権ヲ專ニス。天皇、心コレヲ疾ムト雖モ遂ニ制スルコト能ハズ。」(NIN—0001)と書かれることもあったが、一条天皇に関する内容は、道長との関係ではなく、むしろその優れた治世への評価に重きが置かれ、三条天皇とは対照的であった。

A 「関白」

道長が関白に就いていないことは『御堂関白記』や『小右記』などの日記史料からも明らかであり、これらの

多くが太政官文書の内覧を許可されたこととの混同により生じている。「内覧」とは、天皇に奏上するあるいは天皇が裁可を下す文書を事前に確認することであり、それが関白の職務内容に含まれているために生じた誤解である⁽⁵⁾。

ところで道長を「関白」とするのはいつ頃からであろうか。平安中期にその正編が成立したとされる『栄華物語』には「この粟田殿(道兼)の御事の後より、五月十一日にぞ、左大将(道長)、天下および百官執行という宣旨くだりて、いまは関白殿と聞えさせて、又ならぶ人なき御ありさまなり。」(巻第四みはてぬゆめ)とあり、既に説話文学の中では「関白」と書かれたものがある。また陽明文庫所蔵の『撰関系図』にも「寛弘八年八廿三関白」とあり、鎌倉末期頃成立とされる『一代要記』にも同日の記事として「道長関白如故」、鎌倉末期頃の成立が有力とされる『帝王編年記』もまた「是日為関白」とする。

この認識は『日本政記』や『国史略』といった江戸時代の歴史書にも引き継がれていく。前者は、道長薨去の記事に「称法成寺撰政。又称御堂関白。」としている。後者は、一条天皇の長徳元年に「道長為関白」、治安二年の法成寺金堂落成の大法会では「自是以後世人称道長為御堂関白。」とし、ともに「関白」という表現がみえる。

ところが『大日本史』は異なる解釈を取っている。水戸藩が編纂した『大日本史』【図版9】は、一条から後一条天皇の項に道長の記述があり、また第百三八巻列伝には藤原道長が取り上げられている。一条天皇と三条天皇との関係においては、「道長漸弄威權、帝(一条)厭之。」や「道長屢勸帝禅位、帝惡之。」など道長の「横暴」ぶりが語られている。『大日本史』が著述の素材としているのは、『小右記』などの日記史料、『日本紀略』『扶桑略記』『公卿補任』『尊卑分脈』『愚管抄』などの歴史史料、『栄華物語』『大鏡』『古事談』『古今著聞集』などの説話文学などである。一部であるが、『御堂関白記』も引用され、「所著有蓮府秘鈔」。其日録曰法成寺撰政記」とある⁽⁷⁾。そして「関白」に関しては、「而案諸書、無道長為関白之文^上。故不取。」【図版10】とし、道長の「関白」就任を否定している。

道長を「関白」とする背景には、『御堂関白記』という日記の名称の影響も大きいであろう。その名称は、近

詠和歌寓志曰固能庸乎麼和我庸圖所憶
望不模知頭幾乃加階黨流去登母奈之徒
於望弊麼記小右初道長未顯達與伊周角射

【図版9】
『大日本史』
第三百八卷列伝
藤原道長

太政官文書日本紀略小右記公卿補任百
練鈔○一代要記曰道長關白
如故帝王編年記曰是日爲關白而尚侍
按諸書無道長爲關白之文故不取以尚侍
藤原妍子及藤原成子爲女御日本紀略小
右記一代要

【図版10】
『大日本史』
第三九卷本紀
三条天皇

衛家熙の新写本に用いられたことに由来し、近年では近衛家
に伝わる「歴代関白記」の祖という位置付けの中で説明され
ることが多い。⁹ しかしなぜ「御堂関白記」と称されたかにつ
いて、明確に説明したものはなく、「後世日記に題名を付し
た子孫の尊敬の念が反映している」という説明がなされてい
るに過ぎない。¹⁰

なお「関白」という記述は、国定教科書制度以降の歴史教
科書には見られない。この時期になると、内容の修正がなさ
れているのである。

C 法成寺造営

法成寺造営は、『小右記』『栄華物語』に取材したものである。『小右記』には、法成寺講堂の礎石の料に関し
て「或取_三宮中諸司石・神泉苑門并乾臨閣石」。或取_三坊門・羅城門・左右京職・寺々石云々。」といった内容が
記され、実資は「可_レ嘆可_レ悲、不_レ足_レ言。」と悲嘆の声を挙げている（『小右記』治安三年六月九日・十日条）。

法成寺造営に伴う批判は、明治二十年代後半頃より見られるようになるが、この頃より『小右記』など道長が
生きた時代に近い史料をもとに、より客観性を持った歴史事実による批判へと転換していく。

D 藤原実資

道長と実資との関係性については、『小右記』に書かれる一連の日記より、実資は道長に対し批判的な評価を
与えていたことが目立つが、教科書の中に「道長も常に此人に畏服せり」とあるように、道長が時に儀式作法の
見解を尋ねそれに従っている。実資もまた望ましい儀式の次第・作法から道長が逸脱した場合、あるいは道長が
天皇に対する「不忠」な行動をとった場合にのみ批判をするのであって、必ずしも道長の人物について批判して

いる訳ではない。¹²

また、皇后冊立の日の妨害説（RNI-0032）に関しても、これを引用する教科書が『小右記』を引用し
た結果生じた批判に過ぎない。「作為的な嫌がらせ」というよりは、後見のない皇后の立后への不信というべき
であろうか。¹³

E 望月の歌

望月の歌は、『小右記』に記されたために、その後の説話文学や歴史書の多くに引用されることになったが、
歌の詠み手である道長の日記には、「於_レ此余詠_三和歌」と記すに留まっている。この道長の日記に向かう姿勢に
ついては、多くの先行研究があり、「かきとめることをためらわせた」とか、「書き留める気持ちがなかった」な
どの見解がある。¹⁴

そこで改めて、望月の歌を詠んだその場面の状況を見ていくと、寛仁二年（一〇一八）十月十六日、内裏にお
いて後一条天皇の女御である成子に対し立后の宣命が下され、成子が居る土御門第において酒宴が行われた。終
盤に差し掛かった頃のこと、道長は「一家立_三三后」、未曾有」のことを成し遂げたためであろうか、実資に対
し、「可_三勸盃於我子」と戯れて述べたり、中宮より禄を給う際には「祖の得_三子禄ハ有や」と述べたり、酔い
も回り良い気分になっていた。その後、実資を招き呼び望月の歌を詠むのであるが、あえて実資に対し和すこ
とを求め、かつ「非_三宿構」(前もって準備していた歌ではない)と前置きしていること、何より『御堂関白記』
に「於_レ此余詠_三和歌」とのみ記していることから、道長の本心を込めた歌であったかについてはやはり疑問符
が付くのである。確かに、歌を遣り取りしたことが多く遺る公任は行成とともに「依_三故四条宮宮司」るため不
参であったが、果たして冷静であったならば実資に和すことを求めただろうか。

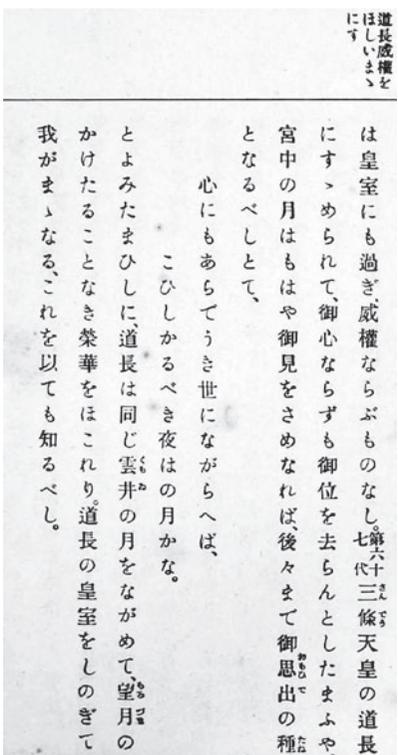
従って、望月の歌を詠む行為を以て道長を「奢僭」などと評価するのは妥当ではない。このことに早く言及し
たのは、日本古典全集『御堂関白記』の中で「御堂関白歌集の後に」を書いた与謝野晶子である。彼女は道長が
実資に望月の歌を示そうとした行為を「酔中の戯謔」とし、「徳川期の史家儒学が驕恣の語として此歌を解した

るより、今もなお此の誤解を襲ひて道長を悪しざまに言う人人」があることを問題として¹⁶⁾いる。

確かに『日本政記』は、望月の歌について、「是道長一家三后。帝與大弟、並為外孫。嘗同集上東門第一。道長喜作歌自頌。以三月望無_レ欽自喻。以語右大将実資、使_レ和_レ之。実資辞曰、秀歌不_レ和。自_レ古然也。」とし、また『大日本史』は、「是歳(寛仁二年)十月十六日、女成子立為_三中宮_一。道長不_レ勝_レ喜、詠寓_レ志曰」と解釈している。この『大日本史』の引用について与謝野晶子は、「其夜の打ち解けたる情景を伝えず」と評している¹⁷⁾。

なお『高等小学国史』上巻(昭和二年、RNI-0066)には、三条天皇の詠歌「心にもあらでうき世にながらへばこひしかるべき夜はの月かな」に続き「道長は同じ雲井の月をながめて、望月のかけたることなき榮華をほこれり。道長の皇室をしのぎて我がまゝなる、これを以ても知るべし。」【図版11】と記されている。「同じ雲井をながめ」たはずの両者が、まったく異なる雰囲気を持つ和歌を詠む、その対比を伝える記述方法は、これまでの教科書とは異なる物語性を有している。

以上、AからEについて検討を試みたが、A、B、Eに関しては、その批判は必ずしも妥当ではなく、Dは、特に三条天皇の時代においてその忠義において対照的であり、道長への批判材料となり得るが、これは『小右記』という実資の視点から見た道長像に過ぎない。道長への批判の材料となりうるのは、唯一Cのみである。



【図版11】『高等小学国史』上巻

三 藤原道長の評価の論理

ではなぜ、藤原道長がこれほどまでに教科書に取り上げられるのだろうか。そこでまず、教科書の中で道長に対し肯定的な評価をしている部分について検討したい。

例えば、このような評価がある。

『小学校用日本歴史外編』第一(明治二十六年、RNI-0042)

道長が関白タリシ一条天皇ノ御世ハ彼ノ紫式部ノ出デシ時ニシテ、其ノ他清少納言、和泉式部、小式部ナド云フ才女多カリキ。

確かに、一条天皇の時代には、多くの文人が輩出され、『源氏物語』など優れた文芸も生まれた。一条朝の四納言と呼ばれる優れた政治家も登場し、その中には「三蹟」の一人である藤原行成、「三舟の才」で有名な藤原公任も含まれている。

これに関しては、「此時ニ当リテ、宗室ニ、兼明親王(前中書主トイフ)源高明(共ニ村上ノ弟)具平親王(後中書王、村上ノ子)等アリ。其他廷臣ニ大江匡衡等アリテ、博学英才ノ者多ケレ共、藤氏宗族朝ニ満チテ、皆用イラレズ。」(『増訂日本小史』上明治二十六年、RNI-0046)という批判をしているものもある。しかし、一条朝において多くの文人を輩出できたのは、一条天皇と道長とによる治世が安定していたからに他ならない。

さらに、道長自身に言及した評価といえは、次のようなものがある。

『小学内国史甲種』巻二(明治三十四年、RNI-0056)

ノ役ヲ怠ルヘカラスト、又宮中ノ石ヲ運ヒテ其ノ用ニ供ス。寺成リテ壯麗ナリ、世道長ヲ御堂關白ト稱ス。道長建築ヲ好ミシヨリ其ノ術進歩シ、家屋ノ體裁一般ニ丈高クナレリ。此ノ一章二百餘年ノ間ハ藤原氏ノ威勢、我々儘花美、贅津ノ登り坂ニシテ、道長ノ時ハ其ノ頂上ニ至レルナリ。此ノ間歌人、畫工、其ノ他藝術ノ名人多ク、スヘテ朝廷ノ風儀ヤサシクナレリ。

【図版12】『小学校用日本歴史 後編』第二

道長長ズルニ及ビテ書ヲ能クシ、詩歌ニ巧ミナリ。当時柔弱ナル公卿ノ間ニ在リテ弓馬ノ道ニ達シ、又膽力アリテ急ニ臨ミテ驚カズ。『小学校用日本歴史 後編』第二(明治二十六年、RNI-0041、【図版12】) 道長建築ヲ好ミシヨリ其ノ術進歩シ、家屋ノ體裁一般ニ丈高クナレリ。

前者は、『大鏡』などの説話文学に取材したものであるが、「書ヲ良クシ」に関しては、『御堂関白記』という自筆本が遺ることによって由来するのではないだろうか。¹⁸⁾

また建築に関していえば、法成寺造営という事実によるところが大きい。法成寺造営については、『小右記』寛仁三年(一〇一九)七月十七日条によると、道長は丈六金色阿弥陀佛十躰と四天王像を安置するための阿弥陀堂の建造に着手したが、受領一人一人に一間四方を配当し、彼らの責任をもって作らせるといふ大胆な采配を振るっている。加えてこの造営の史的意義については、思想史面、美術史面からも研究が蓄積されており、¹⁹⁾あながち見当違いの指摘ではないように思う。²⁰⁾

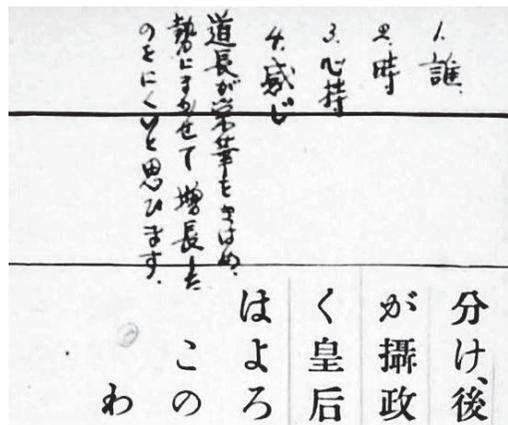
しかし、道長の評価はすべて文化面でのものにとどまっていることに注目したい。これは当時の歴史学の限界であり、また教科書が素材とした江戸時代の歴史書の限界でもあった。戦後、歴史学の発展とともにようやく道長ならびに摂関政治に対する言及が教科書にも掲載されるようになった。ところが戦後まもなく出版された教科書には、「摂関政治では、国政の事務が、摂政や関白の家政を行ふ政所であつた。したがって、一家の利害によつて政治を左右し、国費を流用し、また官吏を私用に使ふなど、公私の別はまったくかへりみられなかつた。」(『日本の歴史』昭和二十七年、RNI-0072)という、所謂「政所政治論」が取り上げられることとなる。²¹⁾

道長の評価は、なお戦前を引きずり続けていたのである。

おわりに

観峰館収蔵品の中には、歴史教育を受けた側の人間の感想が書かれているものがある。『尋常小学国史』上巻(昭和九年、RNI-0067)には、頁上部に使用者の書き込みと思われる箇所がある【図版13】。

道長が栄華をきはめ、勢いにまかせて増長したのをにくいと思います。



【図版13】『尋常小学国史』上巻

教育を受容した人物の感想を示す興味深い「生の」資料である。歴史教科書執筆において、藤原道長という人物は、「専権」「専横」「驕侈」「奢僭」「驕僭」という言葉で評価された。その評価は、『大日本史』や『国史略』をはじめとする江戸時代の歴史書を引用し、次に『小右記』などの日記史料、『栄華物語』『大鏡』などの説話文学、即ち道長が生きた時代に近い歴史史料を引用し、そればかりか、道長と対照的な「忠臣」(実資)を取り上げることで、道長の評価を相対的に貶めていった。

このような批判の方法は、必ずしも道長に限ったことではない。例えば、平清盛の場合、『大日本史』や『日本外史』を素材として清盛を「横暴」と評価していく中で、その対照的な「忠臣」として嫡男・重盛を描く。教科書の中には、いわゆる「鹿ヶ谷事件」に際し、清盛と彼を諫止する重盛とが対峙する場面が挿絵として象徴的に描かれている【図版14】²²⁾。

現在では、平安時代史・摂関時代史研究の進展を背景に事実修正が行われ、加えてさまざまな展覧会での『御堂関白記』の公開をうけ、藤原道長という人物の評価は少しずつ見直されてきて



【図版14-1】『高等小学歴史』二 (RNI-0034)



【図版14-2】『高等小学古今事歴大要』巻一 (NIN-0004)



【図版14-3】『小学国史』巻之一 (RNI-0050)



【図版14-4】『日本小歴史初歩』上巻 (RNI-0061)

いるが、その余波は現在まで脈々と受け継がれているように思う。例えば、藤原道長の時代の歴史事実を構築する場合、主として引用されたのは、藤原実資の日記『小右記』や『栄華物語』『大鏡』などの説話文学であった。本来であれば、道長自身の日記であり、しかも自筆で遺る『御堂関白記』が引用されるべきところ、古写本しか遺らない『小右記』が重視されたのは、内容の豊富さや解りやすさなども関係しているだろうが、江戸時代の歴史書や明治以降の教科書における道長・実資に対する評価も大きく影響しているのではないだろうか。

本論は、藤原道長の人物評価の背景を探る史料を提示したに過ぎない。筆者の立場からいえば、真の道長の評価を行うには、彼の自筆日記『御堂関白記』に根差した研究こそが最重要課題であるといえるが、本論がその基礎作業となることを期待したい。

〔注〕

(1) 『図説教科書の歩み』「6 歴史」(日本私学教育研究所、一九七二年)、山村俊夫「明治前期に於ける歴史教育の動向」(『教育会雑誌』第10号、一九七六年)、木全清博「歴史教科書」『近代日本の教科書のあゆみ』(滋賀大学附属図書館編・サンライズ出版、二〇〇六年)参照。

(2) 例えば『高等小学古今事歴』巻一(RNI-0036)に描かれた高橋松亭(一八七一―一九四五)の挿絵【図版2】などは、『前賢故実』の影響を受けていると考えられ、また道長の数少ない肖像画としても貴重である。

(3) 注(1) 山村論文参照。

(4) 倉本一宏「三条天皇」(ミネルヴァ書房、二〇一〇年)参照。

(5) 山本信吉「平安中期の内覧について」『続日本古代史論集』下(坂本太郎博士古稀記念会編、同著『撰関政治史論考』吉川弘文館、二〇〇三年に再録)。

(6) 京都国立博物館「王朝文化の華 陽明文庫名宝展」(二〇一二年) 作品No.22。

(7) 『御堂関白記』寛弘二年九月十一日条「日来所抄蓮府秘抄献内。」(平松家本)。

(8) 『大日本古記録 御堂関白記』下(岩波書店、一九五四年)、土田直鎮「御堂関白記解題」(陽明文庫叢書記録文書篇第一輯『御堂関白記』五、思文閣出版、一九八四年)参照。

(9) 名和修「陽明文庫の沿革」(京都国立博物館「王朝文化の華 陽明文庫名宝展」、二〇一二年)

(10) 東京国立博物館「宮廷のみやび 近衛家一〇〇〇年の名宝」(二〇〇八年) 作品No.8 解説。

(11) 他に『御堂関白記』の名称について具体的に言及したのものとしては、山中裕「御堂関白記」と藤原道長の人物像」(陽明記録叢書記録文書篇第一輯『御堂関白記』月報、思文閣出版、一九八三・一九八四年)がある。

(12) 佐々木恵介「小右記―藤原道長に対する評価・所感の調査―」(『歴史物語講座第七巻 時代と文化』風間書房、一九九八年)参照。

(13) この事件については、倉本一宏氏が従来の「嫌がらせ」説を二面的とする見解を出されており、その点に関しては首肯したい。注(4)参照。ただし、当日の『御堂関白記』の記事において、実資、隆家の欠席に「好意的な解釈」とするのはいかがで

あろうか。一方では「右大将」「隆家中納言」と記し、他方では「実資」「隆家」と記しており、『御堂関白記』全体の中で公卿を名前のみで記すことが稀であることを踏まえれば、道長は彼ら二人の行動に相当な不信と不満を抱いていたのではないだろうか。拙稿（『御堂関白記人名表記考―記述態度から見た道長の個性―』『文化學年報』第五六輯、二〇〇七年）参照。

(14) 望月の歌については、竹内理三「この世をば」の歌を日記に書きとめなかった藤原道長（『日本古典文学大系』『栄華物語』下巻月報、岩波書店、一九六五年。『竹内理三著作集第八巻 古代中世の課題』角川書店、二〇〇〇年、再録）、山中裕「御堂関白記」と藤原道長の人物像（『陽明叢書記録文書篇第一輯』『御堂関白記』月報、思文閣出版、一九八三・八四年。同著『平安時代の古記録と貴族文化』思文閣出版、一九八八年、再録）において言及された。両氏はこの歌が『御堂関白記』に記されなかった意味を、「誇りたる歌にわれながら照れた」（竹内）であるとか、「老年期に入った道長は、（中略）もう若いときのように日記に書きとめるようなほとぼる気持ちはなかった」（山中）と述べる。近年では麗谷寿氏が、『藤原道長』（ミネルヴァ書房、二〇〇七年）の中で「泥酔しすぎて翌朝になって日記に向かった時に思い出せなかった、というのは下種の勘ぐりか」と述べている。なお筆者は、「望月の歌は、彼がほろ酔い気分のまま即興で詠んだ歌であり、案外、日記に記すほどの歌ではない、という考えから、それを書き記さなかっただけのこと」と考えている。注(13) 拙稿参照。

(15) 『日本古典全集』御堂関白記（下）（『日本古典全集刊行会、一九二六年』）「御堂関白歌集」参照。

(16) 注(15) 同書「御堂関白歌集の後に」参照。

(17) 注(16) 参照。

(18) 『御堂関白記』の書道史上の評価について、黒板勝美は「全体より見て和様の中にも猶唐様を多く存し、温雅俊秀の筆致を有して居り、決して凡手ではなかったことが認められる」と評価している（『立命館出版部編』『御堂関白記』『御堂関白記解説』、一九三六年）。

(19) 思想史面では、家永三郎「法成寺の創建に関する文献」「法成寺の創建」（『上代仏教思想史研究』法蔵館、一九六六年。『家永三郎集2』岩波書店、一九九七年、再録）、美術史面では、清水擴『平安時代仏教建築史の研究』（中央公論美術出版、一九九二年）などが挙げられる。

(20) 『紫式部日記』冒頭「秋のけはひ入りたつままに、土御門殿のありさま、いはむかたなくをかし」という寛弘五年秋の土御門第の記録も影響を与えていると考えられる。

(21) 「政所政治」論は、土田直鎮「撰関政治に関する二、三の疑問」（『日本史の研究』三三三、一九六一年。同著『奈良平安時代史研究』、吉川弘文館、一九九二年、再録）により、現在では否定されている。

(22) この重盛の諫止は、『平家物語』に取材したものである。上横手雅敬・元木泰雄・勝山清次『日本の中世8院政と平氏、鎌倉政権』（中央公論新社、二〇〇二年）参照。

(23) 黒板氏は、「日記は腹蔵する所を率直に表明するものであるから、自己の意図に任せて執筆される結果、自然語句に前後を生ずること、もなり、当然上に返るべき所をそのまま、読み下しに書いたり、返らなくてもよい所を返ったり、又文字の措き所を誤ったりすること、もなるのである。（中略）かゝる事は道長が自ら執筆して行った跡をそのまま、示しているもので、却って研究上興味が多い所である」と、指摘している。注(18) 参照。このことは、これまで十分に検証されぬままにきたのではないだろうか。

(24) 注(13) 拙稿参照。

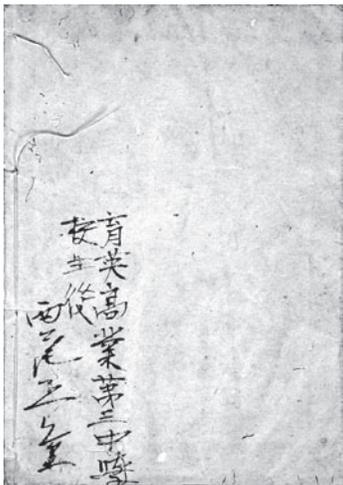
(25) 和本・教科書コレクションの蒐集経緯について、現段階で把握できている事実を述べておきたい。京都市内にあるA古書店への聞き取り調査によると、観峰は、丸物百貨店（京都市下京区）で開催された古書市を期に京都に住居を構え、本格的な古書蒐集を開始する。京都本部を開設したのが昭和四十六年（一九七二）であるので、恐らくそれ以前と考えられる。また、当館収蔵のちりめん本四一冊七二件を調査したところ、うち一六件は、東京（六件）、大阪（四件）、京都（六件）で購入したことが確認できた。その中、京都市内のB古書店に確認を取ったところ、一九八七年に大阪で開催された「A B A J 連合古書店」にて大量の古書を購入したこと、おそらくその時にB古書店が扱うちりめん本を購入したのではないか、との回答であった。

付、観峰館収蔵歴史（日本史）教科書コレクションについて

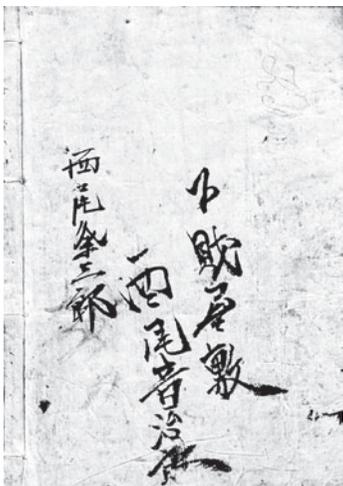
観峰館では、約二四〇〇件、六〇〇〇冊の教科書を収蔵している。これら教科書コレクションについては、『観峰館収蔵品図録（総合編）』にて三五件が掲載されているのみで、目録の公表は未だ実施されていない。そこでこの機会に、歴史（日本史）教科書の目録について新たに整理し、広く研究者に活用していただけるよう、本論の末尾に掲載することとした。

コレクションは目録化された順番により、RNI、RE、RTI、NIN、TSNと分類されている。RNI群は明治初期より昭和二十年代までの教科書を網羅、REは明治時代の一般歴史書、RTIは歴史付図、後に追加で目録化された小学校使用教科書のNIN群、中学校使用教科書のTSN群、新たに従来外国史に分類されていたRGA一件を加えた、合計一三三件、三九七冊をまとめたリストである。

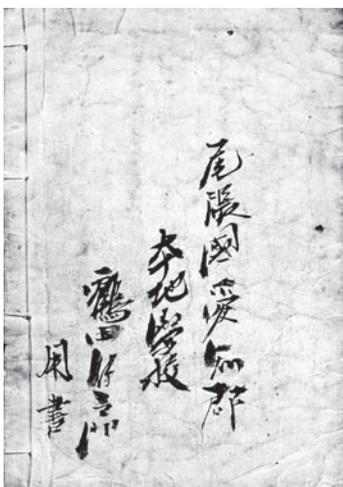
なお収集経緯については不詳といわざるをえないが、多くは全国の古書店より購入したことがうかがえる。また裏表紙などに遺る所有者の記録より、いずれの地方で使用されたものか推測が可能であり、それによると多くは東京、京都、大阪をはじめ兵庫、愛知、三重、島根など、全国各地で使用されたことが確認できる【図版15】。



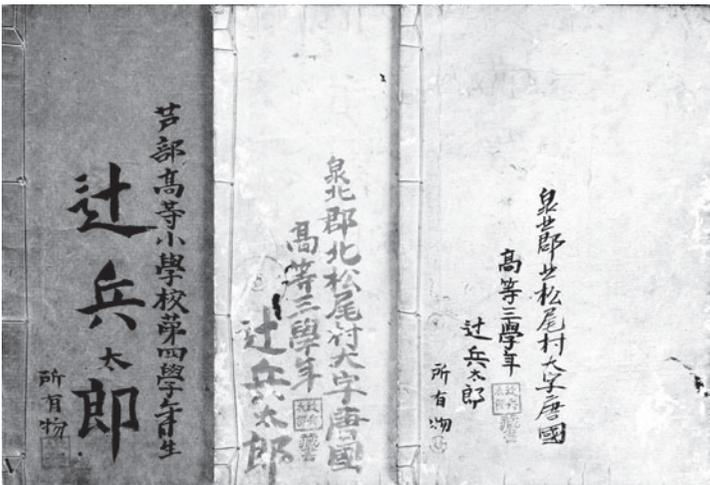
【図版15-1】『翻刻師範学校編輯 日本略史』上



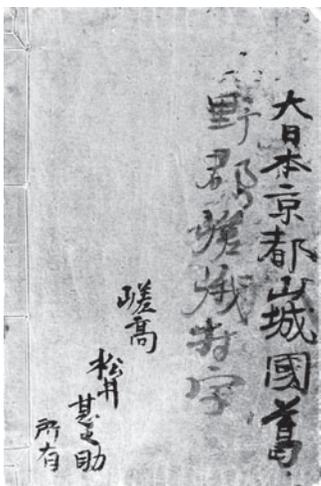
【図版15-2】『師範学校編輯 日本略史』下 (RNI-0008)



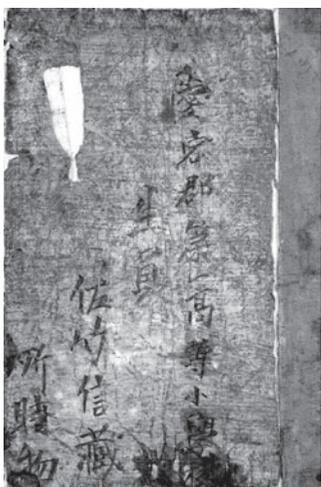
【図版15-3】『翻刻日本略史』四 (RNI-0015)



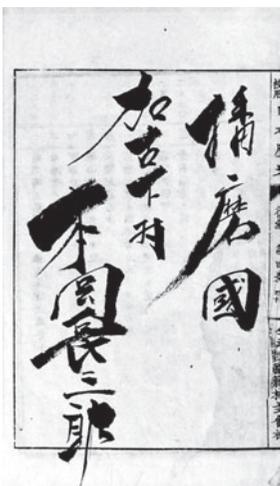
【図版15-5】『小学校用日本歴史 後編』



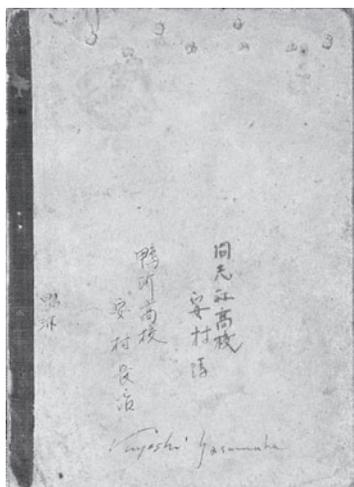
【図版15-4】『小学校用日本歴史 前編』 (RNI-0040)



【図版15-7】『高等小学歴史』巻 (NIN-0033)



【図版15-6】『小学校用日本歴史後編』最終頁 (RNI-0041)



【図版15-8】『民主主義』上 (TSN-0006)



【図版17-3】『高等小学古今事歴』巻二 ハリス来日 (RNI-0036)



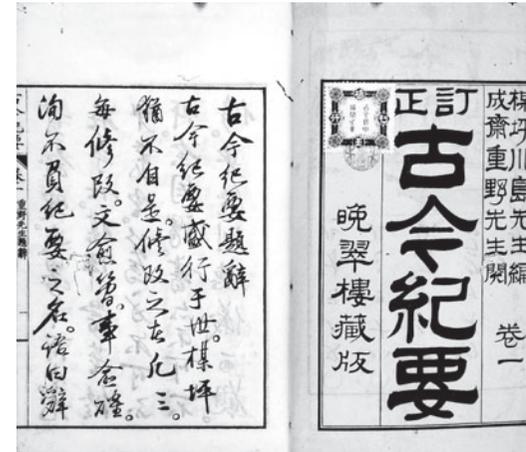
【図版17-1】『小学校用歴史』四内閣諸大臣肖像 (RNI-0030)



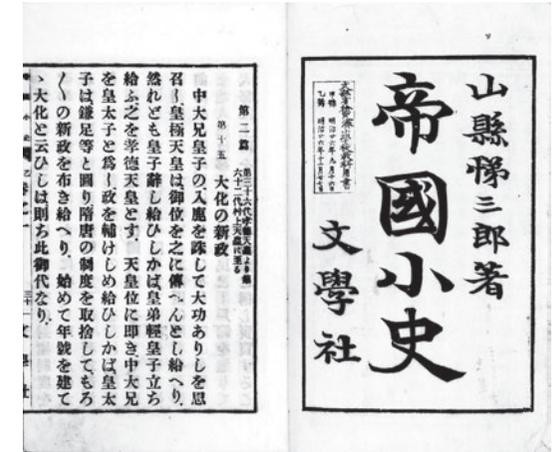
【図版17-4】『皇国史要』下巻 維新の功臣 (RNI-0045)



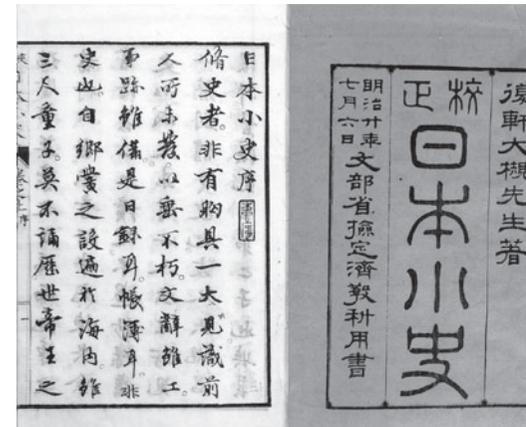
【図版17-2】『初等日本歴史』上巻 清少納言 (RNI-0035)



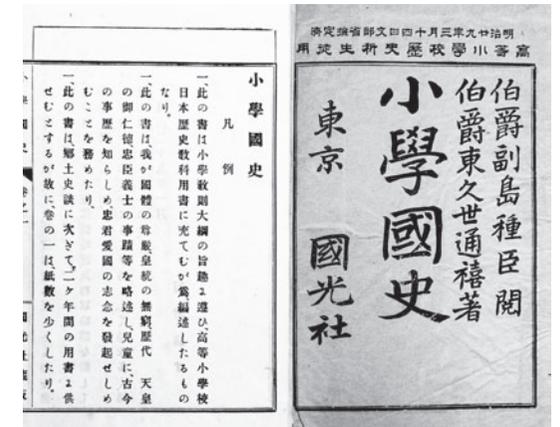
【図版16-4】『訂正古今紀要』巻一 (NIN-0029)



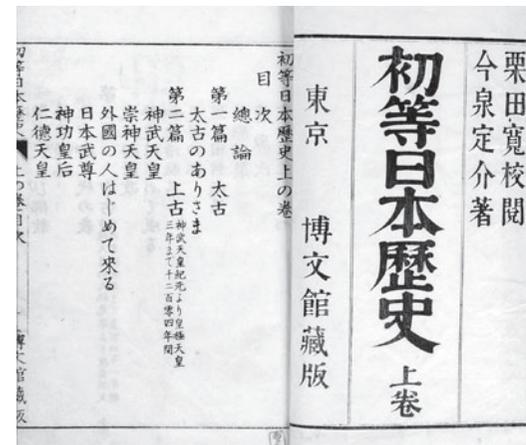
【図版16-1】『帝國小史乙号』巻之一下 (RNI-0043)



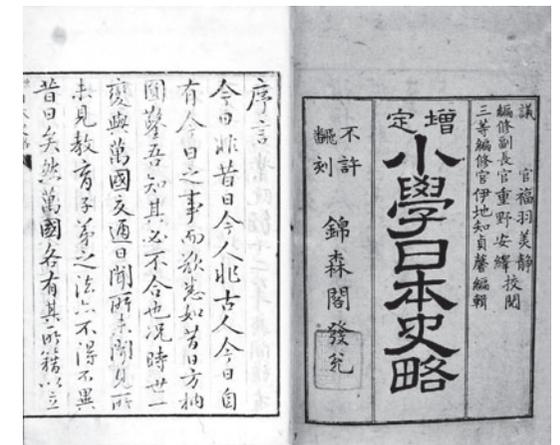
【図版16-5】『校正日本小史』上 (RNI-0026)



【図版16-2】『小学国史』巻之一 (RNI-0050)



【図版16-6】『初等日本歴史』上巻 (RNI-0035)



【図版16-3】『増訂小学日本史略』巻上 (NIN-0020)

観峰館收藏 歴史 (日本史) 教科書コレクション目録

資料番号	タイトル	出版地	著編者名	学制	出版者(社)	発行者(社)	出版発行年	内訳	寸法 (cm)	冊数
RNI-0001	日本略史(二・三・四)	—	空閑益三	—	—	地居堂(神戸)	明治初期	二・三、四	各170×118	3
RNI-0002	師範学校編輯日本略史(上・下)	山梨	木村正幹編/那珂通高訂	小学校	坊力孝太郎	松村九兵衛(大阪)ほか	明治8年	上、下	各220×150	2
RNI-0003	師範学校編輯日本略史(上・下)	三重・兵庫	木村正幹編/那珂通高訂	小学校	小川藤平(上)、鳩居堂(下)	藤屋棧白前門ほか	明治8年	上、下	各215×147	2
RNI-0004	師範学校編輯日本略史(上・下)	滋賀	木村正幹編/那珂通高訂	小学校	加藤長平、沼宗次郎	—	明治8年	上、下	各214×148	2
RNI-0005	師範学校編輯日本略史(上)	大坂	木村正幹編/那珂通高訂	小学校	岡本仙助	—	明治8年	上	202×148	1
RNI-0006	師範学校編輯日本略史(上)	大坂	木村正幹編/那珂通高訂	小学校	木村正兵衛	—	明治9年	E(2)	各20.9×144	2
RNI-0007	師範学校編輯日本略史(上・下)	和歌山	木村正幹編/那珂通高訂	小学校	尾玉林兵衛	—	明治8年	上、下	各20.3×143	2
RNI-0008	師範学校編輯日本略史(下)	大坂	木村正幹編/那珂通高訂	小学校	—	—	明治初期	下	200×140	1
RNI-0009	師範学校編輯日本略史(下)	大坂	木村正幹編/那珂通高訂	小学校	梅原亀七翻刻	—	明治11年	下	208×142	1
RNI-0010	師範学校編輯日本略史(上)	大坂(堺)	木村正幹編/那珂通高訂	小学校	近江佐平、北原佐平、鈴木久三郎、鈴木支蓮翻刻	—	明治11年	上	218×148	1
RNI-0011	師範学校編輯日本略史(下)	大坂(堺)	木村正幹編/那珂通高訂	小学校	松村九兵衛ほか	陸軍文庫	明治12年	下	213×145	1
RNI-0012	師範日本略史(一〜四)	大坂	空閑益三	—	松村九兵衛ほか	—	明治12年	一〜四	各173×118	4
RNI-0013	師範日本略史(一〜四)	大坂	空閑益三	—	文利堂(守田栄助)	細川清助ほか	明治13年	一〜四	各182×128	4
RNI-0014	新譯日本略史(一〜四)	東京	空閑益三編訂/近藤振城訂正	—	中近堂(中島精一)	慶応義塾出版社	明治13年(二〜四) 明治15年再版(一)	一〜四	各22.3×148	4
RNI-0015	翻刻日本略史(四)	愛知	空閑益三	—	亀頭平兵衛ほか	—	明治12年	一、二、三、四	181×126	1
RNI-0016	国史略纂(一〜三・四)	京都	安富国三	—	佐々木惣四郎、藤井孫兵衛	—	明治7年	前編一〜五、 後編六〜十	各18.5×128	3
RNI-0017	啓蒙国史略(前編一〜五)(後編六〜十)	東京	大槻東陽	—	何不成社蔵梓	北村四郎兵衛、江本仁兵衛、田中治兵衛	明治7年	一〜四	各18.3×126	10
RNI-0018	近事紀略(一〜四)	京都	石津賢助	—	—	—	明治8年	一〜四	各22.1×152	4
RNI-0019	日本史略(上・下)	東京・大坂	上羽勝衛	小学校	岡田七郎(東京) 柳原喜兵衛(大阪)	—	明治8年 明治12年再版	上、下(各2)	各22.2×152	4
RNI-0020	国史略纂(卷三十四)	東京	棚谷元善	—	—	—	明治9年	卷一、二、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十五、十六	各22.0×148	6
RNI-0021	校正国史略纂(卷一、二、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十五、十六)	東京	棚谷元善	—	篠崎竹次郎、岩本三二	廣藪堂、徳文堂	明治9年	卷一、二、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十五、十六	各22.0×148	6
RNI-0022	純皇朝略略編(一〜五)	東京・名古屋・京都・大阪	高見篤之輔	—	前川源七郎	北島茂兵衛ほか	明治9年	一〜五	各22.2×152	5
RNI-0023	校刻古今紀要(一・二・四)	東京	川島権平編/重野成高訂	—	晩翠楼(山岡権平)	長島為一郎	明治14年	一、二、四	各21.8×148	3
RNI-0024	小学国史略(二・三)	東京	近藤振城編	—	中島精一	中近堂	明治16年	二、三	各22.0×147	2
RNI-0025	増定小学日本史略(巻上・下)	東京	福羽美静・重野安釋校閲/ 伊地知貞馨著	小学校	伊地知貞馨	石川治兵衛	明治16年三期 明治19年四期	巻上・下(各3)	各22.3×147	6
RNI-0026	校正日本小史(上・中・下)	東京	大槻文彦	尋常中学	柳原喜兵衛、三木佐助	牧野善兵衛ほか	明治20年再版	E(3)、中(2)、下	各22.2×152	6
RNI-0027	増補日本政記(一〜八)	大坂	額山陽	—	額又次郎	田中左右衛門、 和田治郎兵衛、岡田茂兵衛	明治9年	一〜八	各18.4×128	8
RNI-0028	日本文明史略(首巻)	東京	物集高見	中学校 師範学校	文部省編輯局	—	明治19年	首巻	23.1×15.4	1
RNI-0029	初学友誼史(全)	東京	堤正勝編	—	堤正勝	金港堂	明治19年	—	22.1×14.9	1
RNI-0030	小学校用歴史(二〜四)	東京	辻敏之・福地俊一合著	—	辻敏之	普及舎	明治20年	二、三、四	各22.5×147	3
RNI-0031	小学歴史(巻一)	東京	小橋寛次郎	尋常小学	金港堂書籍株式会社	普及舎 金港堂書籍株式会社	明治20年	巻一	22.2×14.7	1
RNI-0032	新譯小学歴史(巻上)	東京	藤本真編並/依田百川校正	尋常小学	阪上平七	阪上平七	明治21年訂正出版	巻上	22.4×14.9	1
RNI-0033	小学校用日本歴史(巻之E・中・下)	東京・栃木	山形徳三郎	尋常小学	桑原三	学海指針社	明治22年三版	巻之E・中・下(各2)	各22.1×15.2	6
RNI-0034	高等小学歴史(二・三)	大坂	文部省編輯局	高等小学	文部大臣官房図書課	日本図書株式会社	明治24年	二、三	各22.8×15.2	2
RNI-0035	初等日本歴史(上巻)	東京	栗田寛則/今泉定小著/ 河野墨彦校書/武内桂舟画	尋常小学	大橋新太郎	博文館	明治25年	上巻	22.5×15.0	1

資料番号	タイトル	出版地	著編者名	学制	出版者(社)	発行者(社)	出版発行年	内訳	寸法 (cm)	冊数
RNI-0036	高等小学古今事歴(巻一、二)	東京	田中登作	高等小学	注大(巻一) 沼沢為作(巻二)	普及舎(注大)巻一 同(辻敏之)巻二	明治26年訂正再版 明治25年出版(巻二)	巻一、巻二	各22.4×14.7	2
RNI-0037	国史要略(巻之一、巻之三、巻之四)	東京	大槻如電	—	小林清一郎	集英堂(小林久郎)	明治26年	巻之一、巻之三、巻之四	各22.7×15.1	3
RNI-0038	高等小学日本歴史(巻一〜四・附録)	大阪・東京	森孫一郎	高等小学	松村九兵衛(巻一〜四) 各口票次(附録)	松村九兵衛	明治26年(巻三) 明治27年訂正再版 (巻一、二、四)	巻一〜巻四、附録	各22.5×15.0	5
RNI-0039	日本小歴史(上・下巻)	東京	天野為之	高等小学	橋藏吉	小野英之助	明治27年訂正三版	上巻(2)、下巻	各22.5×14.7	3
RNI-0040	小学校用日本歴史前編(第一〜三)	東京	金港堂編集部編	高等小学 (第一年・第二年)	金港堂書籍株式会社 (日置九郎)	金港堂書籍株式会社 (原亮三郎)	明治26年 明治27年訂正再版	第一〜三(各5)	各23.0×15.2	15
RNI-0041	小学校用日本歴史後編(第一〜四)	東京	金港堂編集部編	高等小学 (第三年・第四年)	金港堂(原亮三郎)	金港堂(原亮三郎)	明治26年 明治27年訂正再版	第一〜四(各7)	各22.5×14.7	28
RNI-0042	小学校用日本歴史外編(巻一、二)	東京	金港堂編集部編	高等小学	金港堂書籍会社(日置九郎)	金港堂書籍会社(原亮三郎)	明治26年 明治26年2月発行 (巻之二下) 明治26年12月訂正発行 (巻之一上、下)	巻一、二	各23.0×15.0	2
RNI-0043	帝國小史乙景(巻之一上・巻之一下・巻之二下)	東京	山県徳三郎	尋常小学	文学社(小林義明)	文学社(小林義明)	明治28年(巻二) 明治27年訂正再版 (巻之二下)	巻之一上、巻之一下、巻之二下	各22.3×14.3	3
RNI-0044	帝國小史圖書乙景(巻之一、巻之二)	東京	山県徳三郎	尋常小学	文学社(小林義明)	文学社(小林義明)	明治27年訂正再版 (巻之一上、下)	巻之一、巻之二(各2)	各22.0×14.2	4
RNI-0045	皇国史要(上・下巻)	東京	勝浦勲雄	—	吉川半七	吉川半七	明治28年訂正三版	上巻、下巻	各23.1×15.3	2
RNI-0046	増訂日本小史(上・下)	大坂	大槻文彦	尋常中学	三木佐助	三木佐助、柳原喜兵衛	明治29年 明治27年(巻二) 明治28年訂正再版 (第一〜三)	上、下	各22.6×15.4	2
RNI-0047	小学日本歴史前編(第一〜三)	東京	金港堂編集部編	高等小学 (第一年・第二年)	金港堂書籍株式会社 (原亮三郎)	金港堂書籍株式会社 (原亮三郎)	明治28年訂正再版 明治29年訂正三版	第一(2)、第二(3)、第三	各22.4×14.5	6
RNI-0048	小学日本歴史後編(第一〜四)	東京	金港堂編集部編	高等小学 (第三年・第四年)	金港堂書籍株式会社 (原亮三郎)	金港堂書籍株式会社 (原亮三郎)	明治29年訂正三版	第一〜四	各22.8×15.1	4
RNI-0049	小学日本歴史外編(第一〜二)	東京	金港堂編集部編	高等小学	金港堂書籍株式会社 (原亮三郎)	金港堂書籍株式会社 (原亮三郎)	明治29年訂正三版	第一、第二	各22.7×15.2	2
RNI-0050	小学国史(巻之一〜四)	東京	東久世通勝	高等小学	国光社(西沢之助)	国光社(西沢之助)	明治29年訂正五版	巻之一(3)、二(2)、三(2)、四	各22.4×14.7	8
RNI-0051	小学国史第三学年用(巻之三)	東京	東久世通勝	高等小学 (第三年)	西沢之助	—	明治29年訂正五版	第三学年用 巻之三	22.9×15.2	1
RNI-0052	小学国史(巻二、四)	東京	普及舎編/東久世通勝著	尋常小学	普及舎(山田祐三郎)	普及舎(山田祐三郎)	明治33年訂正再版 (付図)	巻二、四	各22.4×14.6	2
RNI-0053	翻修皇国小史(上・中・下)の巻、付図)	東京	勝浦勲雄	尋常中学	野村宗十郎	—	明治31年(上、中、下) 明治30年訂正二版	上の巻、中の巻、下の巻、付図	各22.7×15.3	4
RNI-0054	修正新嘉帝国史要(上・下巻)	東京	芳賀矢一	尋常中学	厚信舎	富山房	明治32年九版(上) 明治32年七版(下)	上巻、下巻	各22.4×14.4	2
RNI-0055	日本歴史甲号(下巻)	東京	前橋孝義	高等小学	厚信舎	富山房	明治33年訂正再版	下巻	22.1×14.4	1
RNI-0056	小学内国史甲編(巻一〜三)	東京	新保豊次	高等小学	金港堂書籍株式会社	金港堂書籍株式会社	明治34年訂正再版	巻一〜三(各2)	各22.2×15.7	6
RNI-0057	小学内国史甲編(全)	東京	新保豊次	高等小学	金港堂書籍株式会社	金港堂書籍株式会社	明治34年訂正再版	—	各22.4×14.9	3
RNI-0058	修正小学内小史精習(全)	東京	新保豊次	高等小学	金港堂書籍株式会社	金港堂書籍株式会社	明治34年修正四版	—	22.7×14.9	1
RNI-0059	新譯小学国史乙編(巻一)	東京	教育同志会編	高等小学	河出静一郎、石井鈞三郎	河出静一郎、石井鈞三郎	明治34年訂正再版	巻一	22.3×15.0	1
RNI-0060	新譯小学国史精習用(全)	東京	教育同志会編	高等小学	河出静一郎	河出静一郎、石井鈞三郎	明治34年訂正再版発行	—	22.4×14.8	1
RNI-0061	日本小歴史現歩(上・下巻)	東京	天野為之	高等小学 (第一、第二年)	橋藏吉	小野英之助	明治27年訂正三版	上巻(3)、 下巻(2)	各22.5×14.8	5
RNI-0062	校刻日本外史(一〜二十二)	東京	額山陽著/保岡元吉校	—	松平直方	—	明治12年五刻	一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二	各22.4×14.8	12

資料番号	タイトル	出版地	著者名	学制	出版者(社)	発行者(社)	出版発行年	内訳	寸法 (cm)	冊数
RNI-0063	国定第1期小学日本歴史(一〜三)	東京・大阪	文部省編	尋常小学	三省堂書店・修文館・国光社	三省堂書店・修文館・国光社	明治38年(一・二) 明治39年(三)	一〜三	各220×14.8	3
RNI-0064	国定第2期尋常小学日本歴史児童用(巻一・二)	東京	文部省編	尋常小学	東京書籍株式会社 (原亮三郎) 大阪書籍株式会社 (三木佐助)	文部省東京書籍株式会社 (原亮三郎) 式会社 (三木佐助)	大正1年	巻一、巻二	各220×15.0	2
RNI-0065	国定第3期尋常小学国史(上・下巻)	東京・大阪	文部省編	尋常小学	大阪書籍株式会社 (原亮三郎) (三木佐助)	大阪書籍株式会社 (原亮三郎) 日本書籍株式会社 (大倉保五郎)	大正9年(上)、 大正10年(下)、 大正15年(下)	上・下巻(各2)	各221×14.9	4
RNI-0066	国定第3期高等小学国史(上・下巻)	東京	文部省編	尋常小学	大阪書籍株式会社 (三木佐助)	文部省 大阪書籍株式会社 (三木佐助)	昭和2年(上・下)、 昭和5年(下)	上・下巻(各3)	各221×15.0	6
RNI-0067	国定第4期尋常小学国史(上・下巻)	東京・大阪	文部省編	尋常小学	大阪書籍株式会社 (三木佐助) 東京書籍株式会社 (石川正洋)	文部省 大阪書籍株式会社 (三木佐助) (三木佐助) 東京書籍株式会社 (石川正洋)	昭和9年(上)、 昭和10年(上)、 昭和15年修正発行(下)	上・下巻(各3)	各210×15.2	6
RNI-0068	国定第5期小学国史(上・下巻)	大阪	文部省編	尋常小学	大阪書籍株式会社 (三木佐助)	文部省 大阪書籍株式会社 (三木佐助)	昭和15年	上巻、下巻	各21.0×15.0	2
RNI-0069	初等科国史(上・下巻)	東京	文部省編	国民学校	東京書籍株式会社 (井上源之丞) 日本書籍株式会社 (大橋光吉)	文部省 東京書籍株式会社 (井上源之丞) 大阪書籍株式会社 (中井利正)	昭和18年	上巻、下巻	各21.0×14.9	2
RNI-0070	くじのあゆみ(上・下)	東京・大阪	文部省編	国民学校	東京書籍株式会社 大阪書籍株式会社 (中井利正)	文部省 東京書籍株式会社 (井上源之丞) 大阪書籍株式会社 (中井利正)	昭和21年	上・下(各2)	各21.0×15.0	4
RNI-0071	日本の歴史(下)	東京	文部省編	中学校	明和印刷株式会社	文部省 中学校教科書株式会社 (小松謙助)	昭和21年	下	21.0×15.0	1
RNI-0072	日本の歴史	東京	文部省編	高校2・3学年用	明和印刷株式会社	文部省 東京図書株式会社 (小松謙助)	昭和27年		20.8×14.7	1
RNI-0001	翻刻再版日本郷土史(上)	岐阜	太田謙	—	岡安慶介(岐阜)	—	明治10年再版		23.0×15.5	1
RNI-0002	官版史略(二・三・四)	兵庫	文部省編	—	高田政七	高田政七	明治時代		20.8×14.7	1
RNI-0003	明治新史(一〜三・五)	滋賀	北川舜治	—	石田忠兵衛・柳原喜兵衛	明治時代		支那、西洋上、 西洋下	各22.0×15.5	3
RNI-0004	高等小学古今事歴大要(巻一・二)	東京	田中登作	高等小学	沼尻茂作	普及会(比較之)	明治28年初版 明治29年訂正再版 明治30年訂正再版	巻一・二 (各3訂正再版は2セツト)	各19.0×13.0	4
RNI-0005	皇国内国史甲種(全)	大阪	勝浦新雄	尋常中学	野村宗十郎	吉川半七、松村九兵衛	明治34年訂正再版	巻一〜三	各22.0×14.5	3
RNI-0006	小学内国史甲種(巻一〜三)	東京	新保馨次	尋常小学	金港堂書籍株式会社 (原亮一郎)	金港堂書籍株式会社 (原亮一郎)	明治34年訂正再版	巻一〜三	各23.0×15.5	3
RNI-0007	帝国小史之号(巻之一・下巻之二上・下)	東京	山県徳三郎	尋常小学	小林義則	文学社	明治25年(巻一) 明治27年(巻二) 明治28年(巻二)	巻之一・下巻之二上・下	各22.0×15.0	4
RNI-0008	国定第1期小学日本歴史(一〜三)	東京・大阪	文部省編	尋常小学	三原松印印刷所(三原松外吉) 修文館(鈴木常松)ほか	大橋新太郎・文部省ほか	明治27年 明治28年 明治28年	一(3)、二(3)三(2)	各22.0×15.5	8
RNI-0009	国定第2期尋常小学日本歴史児童用(巻一・二)	東京	文部省編	尋常小学	文部省編	文部省	大正1年修正出版	一(2)、二	各22.0×15.5	3
RNI-0010	尋常小学国史第四五学年用	東京	帝国初等教育会編	尋常小学 (第五学年用)	古田市郎平	錦美堂書店	大正11年	一	22.5×15.0	1
RNI-0011	国定第5期初等科国史(下)	東京	文部省編	国民学校	大阪書籍株式会社	文部省	昭和19年修正発行	下	21.0×15.0	1

資料番号	タイトル	出版地	著者名	学制	出版者(社)	発行者(社)	出版発行年	内訳	寸法 (cm)	冊数
RNI-0012	尋常小学国史総図(下巻)	東京	中村孝也監修/小堀新吾・尾竹竹坡・尾竹国藏監修・画	尋常小学 (第六学年用)	学習社(財原五郎)	学習社	昭和14年修正十二版	下巻	22.0×15.0	1
RNI-0013	樽訂改訂小学日本歴史図尋常六年用	東京	森野由之助/池田多門編	尋常小学	武田福蔵	武田文盛館	大正6年2月		22.0×15.0	1
RNI-0014	国定小学日本歴史問答	大阪	歴史研究会編	尋常小学	田中栄栄堂	—	明治44年		19.0×13.0	1
RNI-0015	訂正増補問答小学日本歴史問答児童用	大阪	歴史研究会編	尋常小学	園田藤三郎・山田元吉	田中栄栄堂 (田中大石衛門・大塚宇二郎)	明治40年増訂発行		22.5×15.0	1
RNI-0016	校刻古今地要(一・二・三)	埼玉・大阪	川島梅坪編/重野成寅編	—	晩翠楼(川島浩)	長島為一郎、吉川半七、 松村九兵衛	明治14年	一(2)、二(3)、三	各22.0×15.0	6
RNI-0017	小学諸藩十割(完)	東京	高橋恕風/村田観著	小学校	—	松澤堂	明治6年	上、下	22.5×15.0	1
RNI-0018	日本略史教授(上・下)	大阪	教育同志会編	高等小学	河出静七	松澤堂	明治10年		各28.5×12.5	2
RNI-0019	新撰小学国史 補用用(全)	大阪・岐阜	福羽聖静・重野安釋校閲/ 伊地知貞馨著	小学校	伊地知貞馨	石井錦三郎	明治34年再版発行		22.5×15.0	1
RNI-0020	増訂小学日本史略(巻上)	東京	山県徳三郎	尋常小学	小林義則	文学社	明治16年第三版	上	22.5×15.0	1
RNI-0021	帝国小史 甲号(巻之一・巻之二)	東京	山県徳三郎	尋常小学	小林義則	文学社	明治25年(一) 明治26年訂正発行(二)	巻之一、巻之二	各22.5×14.0	2
RNI-0022	師範学校編輯日本略史(上・下)	京都・鳥取	木村正徳編/那珂理通高訂	小学校	小川金刀(編輯) 横山安治郎(取)	中西嘉助(京都) 龍淵堂(鳥取)	明治8年 明治9年	上・下(各2)	各22.5×15.0	4
RNI-0023	小学内国史甲種(巻三)	東京	新保馨次	尋常小学	金港堂書籍株式会社	金港堂書籍株式会社	明治34年訂正再版	巻三	23.0×15.0	1
RNI-0024	新撰小学歴史(巻下)	東京	藤本真編次/ 依田百仙校正	尋常小学	阪上半七	阪上半七(東京)	明治21年訂正出版	巻下	22.5×15.0	1
RNI-0025	刪修皇国内史(上の巻・中の巻)	東京	勝浦新雄	尋常中学	吉川半七	吉川半七	明治31年訂正再版	上の巻、中の巻	各23.0×15.0	2
RNI-0026	国史紀要(巻中)	大阪	岡本監輔	尋常小学	成美堂(三浦潮助)	石井錦三郎	明治21年 訂正第三版	巻中	22.5×15.0	1
RNI-0027	帝国小史甲号(巻之一・巻之二)	東京	山県徳三郎	尋常小学	文学社(小林義則)	文学社(小林義則)	明治25年(巻之一) 明治26年(巻之二)	巻之一、巻之二	各22.5×15.0	4
RNI-0028	帝国小史之号(巻之一・巻之二上)	東京	山県徳三郎	尋常小学	文学社(小林義則)	文学社(小林義則)	明治18年	巻一	各22.5×14.5	2
RNI-0029	訂正 古今紀要(巻一)	埼玉	川島梅坪編/重野成寅編	—	晩翠楼(川島浩)	長島為一郎(埼玉) 吉川半七(東京)	明治18年		23.0×15.0	1
RNI-0030	小学日本史(三・五・六)	大阪	新保馨次	尋常小学	金港堂(原幸吉)	金港堂(原亮三郎)	明治22年訂正再版	三(2)、五、六	各22.5×15.0	4
RNI-0031	帝国小史(全)第三学年用	東京	山県徳三郎	尋常小学	大日本図書株式会社	—	明治27年訂正再版	上	22.5×14.5	1
RNI-0032	くじのあゆみ(上巻)	東京	文部省総務局図書課 神谷由道編	高等小学	文部省総務局図書課	大日本図書株式会社	明治24年	巻	各23.0×15.5	1
RNI-0033	高等小学歴史(巻)	東京	文部省総務局図書課 神谷由道編	国民学校	大坂書籍株式会社	文部省 大阪書籍株式会社	昭和12年	上・下(各本)	21.0×15.0	1
RNI-0034	くじのあゆみ(上・下)	東京	頼山陽	—	—	文部省 大阪書籍株式会社	昭和12年	上下(各本)	22.0×15.0	1
TSN-0001	中学読本日本外史鈔 楠氏	大阪	頼山陽	—	—	柳町喜兵衛ほか	明治31年	楠氏	21.0×15.0	1
TSN-0002	新修日本史	東京	東京大学文学部内史学会編/ 室月圭吾著	中学校	山川出版社	山川出版社	昭和32年		21.0×15.0	1
TSN-0003	日本の歴史	東京	文部省編	中学校	中教平版印刷所	中等学校教科書株式会社	昭和24年修正発行		21.0×15.0	1
TSN-0004	くじのあゆみ(上巻)	東京	大槻馨溪	尋常中学校 尋常師範学 校	川崎貞吉	小川尚栄堂(小川黄松)	明治45年十六版	前編 後編	各22.5×15.0	2
TSN-0005	近古史談(前編・後編)	大阪	大槻馨溪	尋常中学校 尋常師範学 校	鈴木常松	—	明治40年(38)、 明治44年(45)、 大正4年(51)	前編 後編(各3)	各22.5×15.0	6
TSN-0006	民主主義(上・下)	東京	文部省編	中学校	二葉印刷株式会社	教育図書株式会社	昭和23年(上) 昭和24年(下)	上、下	各21.0×15.0	2
TSN-0007	日本歴史地図増訂改版	東京	三省堂編輯所編	中学校 高等及学校 実業学校	三省堂	三省堂	昭和9年修正四版	—	23.0×15.0	1
TSN-0008	中等教科日本歴史地図初級用	東京・大阪	藤田明	尋常中学	小島長蔵	宝文館	大正5年訂正再版	—	22.3×15.2	1

資料番号	タイトル	出版地	著者名	学制	出版者(社)	発行者(社)	出版発行年	内訳	寸法(cm)	冊数
RRE-0001	史略(一～四)	高知	文部省編/木村正彦/ 内田正雄	小学校	高知県翻刻	—	明治7年2月	皇国、支那、西洋上、西洋下	各22.5×15.0	4
RRE-0002	官版史略(一～四)	和歌山	文部省編/木村正彦/ 内田正雄	小学校	和歌山県翻刻	平井文助	明治7年2月	皇国、支那②、西洋上、西洋下②	各21.0×14.5	6
RRE-0003	官許史略(一～四)	滋賀	文部省編/木村正彦/ 内田正雄	小学校	滋賀県	理想湖新聞会社蔵粋	明治7年7月	皇国、支那、西洋上、西洋下	各22.5×15.5	4
RRE-0004	官版改正再刻 史略(一～四)	三重	文部省編/木村正彦/ 内田正雄	小学校	藤古堂蔵版(一) 加藤長平蔵版(三)	山本庄兵衛3か	明治8年5月	皇国、支那、西洋上、西洋下	各22.0×15.0	4
RRE-0005	小学史佐都(上・中・下)	東京	馬場吉人	小学校	—	青山清吉	明治8年序	上・中、下	各22.5×15.0	3
RGA-0006	万国史略皇国之部(全)	東京	大槻文彦	—	錦林堂(石川治兵衛)	—	明治8年	卷二	22.5×15.0	1
RTD-0001	小学校生使用歴史図(全)	東京	小学堂編集部編	小学校	金港堂	—	明治22年	—	22.4×14.8	1
RTD-0002	高等小学校生使用大日本歴史一覽表(全)	長野・東京	長野・東京 校務部	高等小学	笠原勘次郎	笠原勘次郎	明治25年	—	25.5×16.0	1
RTD-0003	新定小学日本歴史付図	大阪	歴史研究会編	高等二年	—	田中栄栄堂	明治時代	—	22.0×14.7	1
RTD-0004	訂正増補新定小学日本歴史付図	大阪	歴史研究会編	小学校 (第一学年～ 第四学年)	園田藤三郎、山田元吉	田中栄栄堂	明治40年増訂発行	—	各22.0×13.0	2
RTD-0005	日本歴史年表	大阪	籠原市之助校閲/ 池田晋彦著	—	堀越幸	矢島誠進堂	明治42年	—	22.0×15.0	1
RTD-0006	増補改定小学日本歴史付図 (尋常五年用・尋常六年用・高等一年用)	大阪	萩野由之校閲/ 淺田多門編	尋常五年 尋常六年 高等一年	武田福蔵、武田栄三	武田交盛館	大正5年(五年) 大正6年(高等一年) 大正7年(六年)	尋常五年用、尋常六年用、 高等一年用	各22.0×15.0	3
RTD-0007	高等小学日本歴史付図(第二学年用)	東京	萩野由之校閲/ 淺田多門編	高等科第二 学年用	—	武田交盛館	大正11年	第二学年用	22.0×14.5	1
RTD-0008	尋常小学国史学習付図(第五学年用)	東京	国史研究会編	尋常小学 (第五学年)	駿々堂書店	駿々堂書店	昭和8年改訂	第五学年用	22.0×15.0	1
RTD-0009	尋常小学国史絵図(上巻)	東京・大阪	中村孝也監修/ 小堀駒吉・尾竹竹坡・ 尾竹四郎監修並叫	小学校(尋常 五学年用)	四村辰五郎	学溥社	昭和9年修正七版	上巻	21.5×14.5	1
RTD-0010	尋常小学国史付図(第五学年・第六学年)	東京・大阪	熊澤悠五郎編/植田恵一・勝 田哲編	尋常小学 (第五学年・ 第六学年)	—	潮川弘文社	昭和10年八十版(第五) 昭和13年五十五版 (第六)	第五学年、第六学年	各21.5×15.0	2
RTD-0011	兵庫県教育会選定尋常小学国史付図 (第六学年用)	大阪・東京	菊池勝之助・ 中山栄作共編	尋常小学 (第六学年)	—	文明社、立川書店	昭和9年改訂十九版	第六学年用	21.5×15.0	1
RTD-0012	高等小学国史付図(上巻・下巻)	大阪・東京	菊池勝之助・ 中山栄作共編	高等小学	—	立川文明堂	昭和13年改訂 七十五版(上)、 昭和16年改訂 二百五十版(下)	上巻、下巻	各22.0×15.0	2
RTD-0013	高等小学日本歴史付図(第二学年用)	大阪	萩野由之校閲/ 淺田多門編	高等第二学 年	武田福蔵	武田交盛館	大正10年	第六学年用	21.5×14.5	1

【凡例】

- 1、本目録は、郵便館に収蔵する歴史(日本)教科書コレクションをまとめたものである。
- 2、項目は、資料番号、タイトル、出版地、著者名、学制、出版者(社)、発行者(社)、出版発行年、内訳、寸法(縦×横、cm)、冊数の順としている。
- 3、教科書の中には重複するものも含まれるが、資料番号を基本としており、かつ出版発行年を考慮し、そのまま掲載している。
- 4、本目録作成は、これまで当館に勤務してきた多くのスタッフの尽力によるものである。改めて謝意を表したい。